様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３０４２

研究課題名（和文）「悪」として取り締まられる妖術、「悪」を取り締まる「呪詛」の人類学的研究

研究課題名（英文）An anthropological study of the notion of witchcraft as crime, and curse as deterrence

研究代表者
梅屋　潔（UMEYA, Kiyoshi）

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：８０４０５８９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：近隣の地域、つまりテソ地域の「呪詛」概念「イラミ」についての研究が進んだ。また、ブガンダ王国のジョセフ・ムロンド王子を日本に招聘できたことでブガンダにおける「呪詛」についての理解も進んだ。地域的にもカラモジャ地域にも調査に訪れることができ、波佐間逸博長崎大学准教授、フランシス・ニャムンジョ・ケープタウン大学教授と研究会などを通じて多くの示唆を得た。妖術研究の理論的な問題が立ち上がってきたカメルーン社会への展開可能性も含めて予想外の展開であった。比較参照点のひとつだったランギへの展開が進捗しなかったこと、法的な問題への切込みが、思ったほど進まなかったことについては今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：Research on the concept of curse in the neighboring area, Iteso area, considerably advanced by fieldwork. In addition, understanding of the indigenous concept of curse in Buganda also made a progress in the discussion at the meeting with Prince Joseph Mulond of Buganda in Kobe University. We could visit the area as well as the Karamoja area, and we got many suggestions through the academic cooperation with Itsuhiro Hazama, Associate Professor of Nagasaki University, and Professor Francis Nyamunjo, Cape Town University. It was an unexpected development including the possibility of deployment of my research to Cameroon society where one of the major theoretical problems of witchcraft study has originated from. My future task remains reflecting the fact that the development to Langi people, which was expected as one of the comparison reference points, did not proceed so well, and the fact that the consideration on legal aspects of witchcraft did not progress as much as we expected.

研究分野：社会人類学

キーワード：呪詛　ウィッチクラフト法　ブガンダ王国　バンツーとナイル系

１．研究開始当初の背景

現在、アフリカの「霊的治安」の悪化 Spiritual Insecurity［Ashforth 2001: 213; 2005: 3］が指摘される。それは、かつて「妖術」を「未開」の「遅れた」「野蛮」な「子供」の信仰とあざ笑い、単にその行為レベルの禁止を行った植民地行政官を逆に嘲笑するかのように、現在には近代的な犯罪、児童に対する虐待・虐殺、性犯罪、あるいは体の一部を切り取った売買などというオカルト・エコノミーとして、新聞などを賑わすことになっている。それに対して多くの専門家は、近代化と脱植民地化そして近代国家の政策などから、資本主義の浸透による世代間などの貧富の格差と階級間格差の拡大をその遠因とする。これらの格差と階級闘争の激化が、妖術の質を変え、妖術に関わる暴力的な事件の温床となっているという分析を行ってきた。私は、この仮説を一面的だと考え、本年度までの研究で、必ずしも資本主義の流入や格差の増大が、「妖術」の先鋭化と暴力化へとは結びつかないことを解明しつつある。現在は仮説の段階であるが、基本的には妖術信仰には、その攻撃性を抑制する装置、つまり濫用を統制する術が内蔵されていたはずなのである。たとえば、私が長年調査してきた西ナイル系アドラでは、「ラム」といい、年長者の「呪詛」（長島［1987］以来この訳語が定着）がそれに当たる。これはある種の教育の補助システムといえるものであって、年少者が社会的秩序を無視したり冒涜したりしたときに発動するものであった（［梅屋 2008, 2012］など）。これは、当該社会には現在でもある程度機能しており、いわゆる近代化に際してその信念はさほどの衰えをみせてはいない。しかしながら、植民地行政官たちがつくった「ウィッチクラフト法」は、この「呪詛」のような社会的秩序維持の機能も教育機能も理解せず、ひとしなみに、「ウィッチクラフト」とそれに関する行為を「犯罪」「悪」として禁止してしまった（少なくともそう解釈されうるような）法整備をした。そのことは、「悪」を取り締まるはずの「呪詛」をも弱体化することにつながり、結果的に「私的」で「利己的」な近代的な欲望に支えられた「妖術」事件の増大を生んだと考えられる。この法律の負の効果は、ウガンダでは中心部に行けば行くほど顕著であったと推測する。対照的に、私の調査しているウガンダ東部などでは、権力がクラン外部にまで及ばない無頭社会（acephalous societies）であることが幸いしていたところもある。いかに都市化、個人化が進んで人々がアトム化（atomize）されたとしても、親族の紐帯はそうそう断ち切れないからである。一方で、王国は、近代化によって民衆からどんどん遠ざかっていく傾向にあり、その「妖術」コントロールの面では、王国の権威は、民衆レベルではほとんど意味がないと言ってもよい。私はこのあたりにウガンダで凶悪オカルト犯罪が旧王国地域に集中する要因があると睨んでいる。そうした傾向を踏まえて、「呪詛」を弱体化しない範囲で地域に根ざした法整備ないし法解釈を行えば、「妖術」にまつわる社会不安を沈静化させる手立てを手にすることができるだろう。「妖術」は両義的なものであること、社会秩序に反する「悪」の側面を持っているのは事実である。それ以上に、その「力」をコントロールするいわば「善」の装置もその信仰体系には本来的に内在していたことは、とくに植民地期のウィッチクラフト法の法整備段階では等閑視されていたと言っていいだろう。本研究はそれらの実態を明らかにする歴史人類学への道、そして、過去と現在を結びつけたうえで、未来を構する法人類学への道を切り開こうとするものだった。

２．研究の目的

当時も現在もウガンダで問題になっているのは「人間供犠」（human sacrifice）といわれるもので、人間を殺害することで、何らかの「力」を獲得し、場合によってはその体の一部をお守りや呪具のようにもちいることである。このための殺害事件、遺体損壊事件が話題となっている［Waswa & Miirima 2006］。とくに幼児や場合によってはアルビノなどがターゲットにされ、社会問題となっている。現在までのところ、それは私のこれまで調査してきた西ナイル系社会や、東ナイル系社会では見られない、ウガンダ中部および西部にきわめて限定的な事案である。私は西ナイル・東ナイル社会では長老、あるいはクランの「呪詛」が、歯止めになっていると考えている。だから、事件が起こった社会に、「呪詛」のような社会の逸脱行動を規制するような信仰があるかどうかを検討するとともに、そういった「呪詛」が維持された社会ではいかにしてそれが維持されるようになったのかを検討することが必要である。すでにガンダ社会では、Geschiere［1997］の詳しい報告があるカメルーン西部とは対照的に、「妖術」が王権の管理下で抑制されることはなく、ひどく蔓延している実態がわかっているが、ならば、王権が「妖術」とどのような距離で接しているのか、その詳細な実態が次には把握されるべきだろう。したがって、本研究では、（１）近代国家としてのウガンダの「ウィッチクラフト法」の詳細と判例の検討。（２）ガンダ王国における「妖術」への対処の実態。ガンダ人の「妖術」の濫用抑制のためのイデオロギー装置の有無の検討。（３）ナイル系諸社会における「呪詛」の残存実態の解明と、「ウィッチクラフト法」自体の普及実態。妖術関係の「ネイティブ・コート」あるいは長老会議（バラザ baraza）のケースをあつめること。（４）クラン・コートにおける、「妖術」と「呪詛」に対する態度と、クランにおける「ウィッチクラフト法」への態度などの資料を蓄積することを通じ

て、以上の問題を解明しようとするものであった。

３．研究の方法

本研究計画では、妖術にまつわる暴力犯罪など事件についての新聞、雑誌、官報などの印刷物の収集と、現地調査での録音・録画などによって記録されるインタビューや歌などの言語資料の蓄積という二つの作業からなっている（補足的なものとして映像資料も蓄積する）。したがってウガンダと日本におけるライブラリーワークと、ウガンダにおける数カ所の比較参照点および首都カンパラにおけるフィールドワークが本計画の柱となる。フィールドワークにおいては、事前にウガンダ側の研究協力者（マケレレ大学・エドワード・キルミラ教授）をふくむウガンダ国における研究支援体制を構築し、質問項目の作成や調査地の選定に万全を期す。具体的には、以下の（１）～（３）を PDCA を確認しながら循環させることで進める予定であった。

（１）日本でのライブラリーワーク

国立情報学研究所データベース（Nacsis）や ILL（図書館相互貸借）などを最大限に利用しつつ、一橋大学、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、慶應義塾大学、東京大学、天理大学、国立民族学博物館など、アフリカ関連文献が充実した国内研究機関における文献およびマイクロフィルム等の資料を蓄積する。あわせて利用可能な文献リストを充実させる。

（２）現地情報収集と研究打ち合わせ

調査地の治安や調査基地の設営も含め、ウガンダ北部、東部およびカンパラの現地情報を収集する。在ウガンダ日本大使館、日本学術振興会ナイロビ日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター等から情報を得て治安状況をにらみながら調査を進める必要がある。あわせて、ウガンダ国における研究支援体制を整備する。これまで申請者と JICA 国際協力事業団（現在は国際協力機構）の研究協力を実施したことのあるマケレレ大学人文社会科学学群長エドワード・キルミラ教授や調査助手を務めているマイケル・オロカ氏らと連絡を取り、研究完了まで支援が期待できる支援チームを組織した。

（３）質問項目の検討と調査地の選定

現地でフィールドワークを実施する際の質問項目を検討する。フィールドワーク開始時にはマケレレ大学社会科学部において現地支援チームとともに妥当性について議論・検討し、より妥当性と蓋然性の高い項目を設定できるよう適宜見直しを行う。併せて、以下の条件に適合する調査地を選定する。選定すべき調査地は、①「ウィッチクラフト法」による取り締まりが現実的である首都カンパラ中央部、②「ウィッチクラフト法」施行の影響がさほど強くないはずの農村地帯（これまで調査してきた東部トロロ県を候補とする）③王国の権威が影響力を持つはずの旧王都付近（ブガンダ王国の中心であるメンゴ周辺、ブニョロ王国の中心カルージカ宮殿付近を候補として検討）、④比較民族誌の参照点としてのランギの中心であるリラ付近。選定した地域においてフィールドワークを実施する。比較参照点とする調査地全体の現況を把握する。ペンテコスタ教会（候補のひとつはトロロ県のアゴラ精霊教会）での調査も実施。適宜インタビューを実施し、現地語で書き起こし、英語と対訳テキストを作成する。書き起こしと翻訳、およびデータの打ち込みを行う。併せて総合的な民族誌的資料として立体化させるための観察記録、画像、映像記録を集積する。また、マケレレ大学、国立文書館（エンテベ）など、ウガンダ国におけるライブラリーワークとデータベースにもとづく新聞記事の蒐集も適宜実施する。航路は、関西国際空港―ドバイ―エンテベ。なお万一治安上の問題でウガンダでのフィールドワークが困難になった場合には、首都カンパラあるいは周辺諸国、場合によってはアメリカやフランスなどに亡命・移住しているウガンダ人が多数存在することが確認されているので、情報提供者をそれらの地域に求める可能性もある。

４．研究成果

おおむね予定通り進んで、大きな成果を上げたと考えている。予想を超えた成果としては、長島信弘一橋大学名誉教授をテソ地域に派遣し、独自調査を推進してもらえたこと、ブガンダ王国のジョセフ・ムロンド王子を日本に招聘できたことである。この後者により目的の（２）は飛躍的に理解が進み、前者により目的の（３）は、今後の展開方向のめどが立った。地域的にもカラモジャ地域にも調査に訪れることができ、波佐間逸博長崎大学准教授との協力関係は強化された。また、そのネットワークの延長上にフランシス・ニャムンジョ・ケープタウン大学教授との研究協力が始まり、研究会などを通じて多くの示唆を得たほか、研究成果のアウトプットも共同で行うようになった。このことは、目的でしめしたように、理論的な問題が立ち上がってきたカメルーン社会への展開可能性も含めて予想外の展開であった（ニャムンジョ教授はカメルーン人であり、ゲシーレやコマロフ夫妻の業績を認めつつも批判の可能性を模索している点で代表者と意見が一致している）。うまくいかなかった部分については、地域拡大の比較参照点のひとつだったランギへの展開が進捗しなかったこと、法的な問題への切込みが、思ったほど進まなかったことである（目的の（１）および（４））。あてにしていた研究者との連携が思ったほどうまくいかなかったことにも一因があるが、この部分についてはとくにその点を焦点化した別の研究計画を立てて現在科研費を申請中であり、他日を期したいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）
①梅屋潔「「大主教殺害事件」の被害者の「再埋葬」と記念儀礼―「2016 年ウガンダ総選挙」に働く死者のエージェンシー」『文化人類学』83（1）掲載決定頁数調整中。査読有。
②梅屋潔・波佐間逸博「序　東アフリカにおけるシティズンシップ研究に向けて」『文化人類学』83（1）掲載決定頁数調整中。査読有。
③梅屋潔「エドワード・エヴァン・エヴァンズ＝プリチャード（向井元子訳）『アザンデ人の世界―妖術・託宣・呪術』（2001　みすず書房）」『医療人類学を学ぶための 60 冊―医療を通して「当たり前」を問い直そう』（澤野美智子編）明石書店、42-44 頁、2018 年 4 月、査読なし。
④梅屋潔「浜本満『信念の呪縛―ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』（九州大学出版会、2015 年）」『医療人類学を学ぶための 60 冊―医療を通して「当たり前」を問い直そう』（澤野美智子編）明石書店、35-37 頁、2018 年 4 月、査読なし。
⑤梅屋潔「ウガンダ東部パドラにおけるラム lam の観念」」『人間情報学研究』第 23 巻、37-79 頁、2018 年 3 月、査読有。
⑥梅屋潔「ジャジュウォキ（jajwok）―ウガンダ東部パドラにおけるナイト・ダンサー」（協力：ポール・オウォラとマイケル・オロカ＝オボ）『近代』117 号、1-45 頁、2018 年 2 月、査読なし。
⑦梅屋潔「ルスワ（luswa）―ウガンダ東部パドラにおけるインセスト・タブー」『国際文化学研究』第 49 号、神戸大学国際文化学研究科紀要、1-22 頁、2017 年 12 月、査読なし。
⑧梅屋潔「あるポストコロニアル・エリートの死―ウガンダ東部パドラにおける埋葬儀礼の記録」（協力：ポール・オウォラとマイケル・オロカ＝オボ）『近代』第 116 巻、1-74 頁、2017 年 9 月、査読なし。
⑨梅屋潔「ウガンダ東部パドラにおける「災因論」の民族誌―死霊と憑依、毒そして呪詛の観念（Ⅱ）」（協力：マイケル・オロカ=オボとポール・オウォラ）『国際文化学研究』第 48 号、神戸大学国際文化学研究科紀要、77-109 頁、2017 年 7 月、査読なし。
⑩梅屋潔翻訳フランシス・B・ニャムンジョ「開発というまぼろしが、ウィッチクラフトの噂を広げているのだ―カメルーンの事例を中心として」『思想』1120 号（2017 年 8 月号）、99-127 頁、岩波書店、2017 年 7 月、査読なし。
⑪梅屋潔「「見えない世界」と交渉する作法―アフリカのウィッチクラフトと、フランシス・B・ニャムンジョの思想」『思想』1120 号（2017 年 8 月号）、岩波書店、86-98 頁、2017 年 7 月、査読なし。
⑫梅屋潔'Mobility and its rudiment: some religious concepts of Nilotes,' PanelRM-MRB07, People on the Move, MO(U)VMENT: CASCA/IUAES2017 A Joint CASCA/IUAES Conference in Ottawa, 2nd -7th May Conference Progrrame, pp. 224-225, 2017 年 5 月、査読有。
⑬梅屋潔「ウガンダ東部パドラにおけるティポ tipo の観念」『人間情報学研究』第 22 巻、29-59 頁、2017 年 3 月、査読有。
⑭梅屋潔「グローバルイシューと周辺社会―人類学は、社会の「役に立つ」か？」『新版文化人類学のレッスン―フィールドからの出発』（梅屋潔・シンジルト編）学陽書房、263-287 頁、2017 年 2 月、査読なし。
⑮梅屋潔「フィールドワークと文化人類学―「民族誌する」とはどういうことか？」「審判文化人類学のレッスン―フィールドからの出発』（梅屋潔・シンジルト編）学陽書房、25-49 頁、2017 年 2 月、査読なし。
⑯梅屋潔「「伝統」を逆照射する―ウガンダ東部パドラにおける聖霊派キリスト教会の指導者たち」（協力：ポール・オウォラとマイケル・オロカ＝オボ）『近代』第 115 巻、1-43 頁、2016 年 12 月、査読なし。
⑰梅屋潔「ウガンダ東部パドラにおける「災因論」の民族誌―死霊と憑依、毒そして呪詛の観念（Ⅰ）」（協力：マイケル・オロカ=オボとポール・オウォラ）『国際文化学研究』第 47 号、25-49 頁、神戸大学国際文化学研究科紀要、2016 年 12 月、査読なし。
⑱梅屋潔「ウガンダ東部パドラにおけるトウォ tuwo の観念―病いのカテゴリー88 とその処方」『国際文化学研究』第 46 号、神戸大学大学院国際文化学研究科紀要、1-28、2016 年 7 月、査読なし。
⑲梅屋潔「ウガンダ元大統領代行、故オボス=オフンビの遺品（Ⅰ）―1971 年英国外遊時のアルバムを中心として」『人間情報学研究』第 21 巻、117-135 頁、2016 年 3 月、査読有。
⑳梅屋潔「福音を説くウィッチ―ウガンダ東部アドラにおける民族誌的研究」（第 19 回人間情報学研究所講演講演録）『人間情報学研究』第 21 巻、1-18 頁、2016 年 3 月、査読なし。
㉑梅屋潔「「民族」としての「民俗学者」」『歴博』191 号、7-10 頁、国立歴史民俗博物館、2015 年 7 月、査読なし。
㉒梅屋潔「葬送儀礼についての語り―ウガンダ東部・アドラ民族におけるオケウォの儀礼的特権」『森羅万象のささやき―民俗宗教研究の諸相』（鈴木正崇編）風響社、375-396 頁、2015 年 3 月、査読なし。

〔学会発表〕（計 14 件）
①梅屋潔 2017. 11. 27 Possibility of the Conceptualization of ‘Agency of the Dead’ An Analysis Based on the Dialogue of

Autochthony between Japan and Africa.「シティズンシップの概念化―先行研究の批判的再検討（21 世紀の南アフリカと日本におけるシティズンシップ）」平成 29 年度～30 年度二国間交流事業、南アフリカ（NRF）ケープタウン大学と長崎大学との共同研究（共同研究者、代表：波佐間逸博長崎大学准教授、フランシス・B・ニャムンジョーケープタウン大学教授）、the African Gender Institute, Harry Oppenheimer Building, Level 4. University of Cape Town, Cape Town, South Africa、ケープタウン（南アフリカ）。

②梅屋潔 2017. 9. 29 Feasts to Send-off the Dead: with Special Reference to the Jopadhola of Eastern Uganda.Plenary Session, Feast as a Mirror of Social and Cultural Changes: An Inter national Interdisciplinary Conference, Kraków(Poland), Centre for Comparative Studies of Civilisations (Katedra Porównawczych Studiów Cywilizacji), Jagiellonian University, Grodzka Street 52 (ul. Grodzka 52), 2nd floor, room 119, September 28-30, 2017、クラクフ（ポーランド）。

③梅屋潔 2017.9.20 Voting, Citizenship and Ethnicity: A Case of Ugandan General Election, 2016. Seminar for JSPS Core-to-Core Program (A: Advanced Research Networks) Japan-Asia-Europe Comparative Symposium on Migration, Multiculturalization and Welfare in Naples 2017 Conservatorio delle orfane a Terra murata, Procida September 20-21, 2017、ナポリ（イタリア）。

④梅屋潔 2017. 9.2 （マイケル・オロカ=オボと共著）Witchcraft and Curse in Padhola（「パドラにおけるウィッチクラフトと呪詛―決して保護されることのない伝統的無形文化」）現代民俗学会第 38 回研究会　東アフリカ・ウガンダのフォークロアと文化遺産―文化遺産として承認されるフォークロア／承認されないフォークロア、現代民俗学会（神戸人類学研究会・神戸大学国際文化学研究推進センター共催）、神戸大学鶴甲第一キャンパス A403、神戸大学（兵庫県）。

⑤梅屋潔 2017. 8.18 Re-burial of prominent Luo people in the 2016 Ugandan General Election. Panel1, Citizenship in East Africa: Creative Engagement for New Space. Uganda - Japan Joint International Workshop in Kampala. Situating Universal Concepts to the Reality of Marginalized African Nomads:A Challenge for Area Studies of “Citizenship” and “Humanitarianism.”Grand Global Hotel, Kampala、カンパラ（ウガンダ）。

⑥梅屋潔 2017.7.26 Citizenship including the dead, ancestors and gods: Some clues of discussion from nothern villages in Sado island, Niigata Prefecture, Japan,「シティズンシップの概念化―先行研究の批判的再検討（21 世紀の南アフリカと日本におけるシティズンシップ）」平成 29 年度～30 年度二国間交流事業、南アフリカ（NRF）ケープタウン大学と長崎大学との共同研究（共同研究者、代表：波佐間逸博長崎大学准教授、フランシス・B・ニャムンジョーケープタウン大学教授）、日本学術振興会四天王寺大学あべのハルカスサテライトキャンパス（大阪府）。

⑦ 梅屋潔 2017.5.3 Mobility and its rudiment: some religious concepts of Nilotes. PanelRM-MRB07, People on the Move, MO(U)VMENT: CASCA/IUAES2017 A Joint CASCA/IUAES Conference in Ottawa(convenor Professor Tahara Noriko & Kiyoshi Umeya),Room 022, University of Ottawa、オタワ（カナダ）。

⑧梅屋潔 2016.9.15「人類学的関心と思想のクロスロード―アニミズム、存在論、そしてエージェンシー」「文化とパーソナリティ―心理学　その境界を越えて―」日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会、関西大学千里山キャンパス A301（大阪府）。

⑨梅屋潔 2016.6.19「福音を説くウィッチ―ウガンダ東部アドラのニュー・シティズンシップの記録」「アフリカン・シティズンシップの解明―ウガンダ社会の動態とシティズンシップの関連性」平成 28 年度～平成 31 年度科学研究費補助金（研究分担者、基盤研究（B）、課題番号 16H05664、研究代表者：波佐間逸博長崎大学准教授）、研究会、四天王寺大学あべのハルカスサテライトキャンパス（大阪府）。

⑩梅屋潔 2016.2.28「抗する／交差する―スラム、呪術、抗=妖術」（司会とコメント）「PoP Africa 2016@Kumamoto University―Africa New Generation!! 普段着のディープなアフリカ」日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）（研究代表者慶田勝彦）報告会、熊本大学黒髪キャンパス北地区文法棟 A3 教室（熊本県）。

⑪梅屋潔 2016.2.7「災害で移転するということ―ウガンダ・ブドゥダの事例を通して高台移転を考える」東北大学東北アジア研究センター共同研究「災害と地域文化遺産に関する応用人文学研究ユニット」（研究代表者高倉浩樹）2015 年度第 3 回研究会、東北アジア研究センター、4 階会議室（宮城県）。

⑫梅屋潔 2015.12.19「福音を説くウィッチ―ウガンダ東部アドラの民族誌的研究」東北学院大学人間情報学研究所第 19 回講演会、東北学院大学泉キャンパス 2 号館 2 階 229（宮城県）。

⑬ 梅屋潔 2015.9.19Travelling Religious Concepts among Nilotes: With Special Reference to Jopadhola of Uganda.Mobility, Migration, and Its Discontents: Rethinking Political and Cultural Borders

in Europe and Japan. International Workshop: Conservatorio delle orfane a Terra murata, Procida, Italy. September 18-19, 2015.ナポリ（イタリア）。マイケル・オロカ・オボ（MICHAEL Oloka Obbo）
ジョセフ・ムロンド（Joseph MULONDO）
⑭梅屋潔 2015.6.28「「災因論」「物語論」そして「アブダクション」―ウガンダ東部・パドラ民族誌の予備的考察」国立民族学博物館共同研究会、「呪術的実践＝知の現代的位相―他の諸実践＝知との関係性に着目して」（研究代表者川田牧人）、国立民族学博物館、第 2 演習室（大阪府）。

〔図書〕（計 4 件）
①『医療人類学を学ぶための 60 冊―医療を通して「当たり前」を問い直そう』（澤野美智子編）明石書店、2018 年 4 月（梅屋潔は共著者）総頁数 240 頁、担当は、35－37, 42-44 頁。
②梅屋潔『福音を説くウィッチ―ウガンダ・パドラにおける「災因論」の民族誌』風響社、2018 年 2 月、総頁数 760 頁。
③『新版　文化人類学のレッスン―フィールドからの出発』（梅屋潔・シンジルト編著）学陽書房、2017 年 2 月、総頁数 312 頁、担当部分は、25-49 頁、263-287 頁。
④『森羅万象のささやき―民俗宗教研究の諸相』（鈴木正崇編）風響社、2015 年 3 月（梅屋潔は共著者）、総頁数 1000 頁、担当箇所は 375-396 頁。

〔その他〕
ホームページ等

Profile of Kiyoshi Umeya's Official Web Site
http://www2.kobe-u.ac.jp/~umeya/site01/profile.html

６．研究組織
(1)研究代表者
梅屋　潔（UMEYA Kiyoshi）
神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
研究者番号：80405894
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
長島信弘（NAGASHIMA Nobuhiro）
一橋大学・社会学研究科・名誉教授
波佐間逸博（HAZAMA Itsuhiro）
長崎大学多文化社会学部・准教授
平野智佳子
神戸大学・大学院国際文化学研究科・博士後期課程
エドワード・K・キルミラ（KIRUMIRA K. Edward）
マケレレ大学・人文学社会科学群・教授
エリア・オロー・オニャンゴ（ERIA Olowo Onyango）
マケレレ大学・人文学社会科学群・講師
マイケル・オロカ・オボ（Oloka Obbo MICHAEL）
ワールドビジョン・ウガンダ
ジョセフ・ムロンド（Joseph MULONDO）
サー・エドワード・トラベル・エージェンシー